[課程-2]

審査の結果の要旨

氏名　　後藤　修

本研究は早期胃癌に対する局所治療法としての内視鏡的粘膜下層剥離術(Endoscopic submucosal dissection: ESD)の有用性を明らかにするため、リンパ節転移陰性と考えられる分化型早期胃癌に対する ESD の短期治療成績および長期予後について遡及的解析を行った。また、主な偶発症の一つと考えられる術後出血に関する遡及的解析を行い、適切な術後管理について検討を試みた。下記の結果を得ている。

1. 短期成績に関して、一括切除率 96.7%、完全一括切除率 91.7%、術後出血率 5.1%、穿孔率 4.0%であった。
2. リンパ節転移陰性と考えられる分化型早期胃癌を①潰瘍所見を伴わない脈管侵襲陰性粘膜癌(M-UL[-]群)、②潰瘍所見を伴う 3cm 以下の脈管侵襲陰性粘膜癌(M-UL[+]群)、③潰瘍所見を伴わない粘膜筋板下 500μm までに留まる 3cm 以下の脈管侵襲陰性粘膜下層浸潤癌(SM1 群)に分類したところ、短期成績の検討項目の全てにおいて 3 群間で有意差を認めなかった。
3. 長期成績において、観察期間中央値 36 か月(2-93 か月)における遺残再発率は 0.9%であった。また、観察期間中央値 38 か月(6-97 か月)において 3 年/5 年全生存率 96.2%/96.2%、3 年/5 年疾患特異的生存率 100%/100%であった。上記 3 群間で全生存率に有意差を認めなかった。

4. 術後出血は 454 病変中 26 病変に認めた(5.7%)。単変量解析において肉眼型(0-Ⅱb もしくは 0-Ⅱc)のみが有意に術後出血に影響する因子であった。
5. 術後 24 時間以内の出血 7 病変を除く 19 病変のうち、second-look 前出血群は 8 病変、second-look 後出血群は 11 病変であった。累積最大出血率はそれぞれ second-look 前出血群で 2.8%、second-look 後出血群で 2.5%であった。

以上、本論文は胃温存療法としての ESD がリンパ節転移陰性分化型早期胃癌に対する根治的治療法として外科手術にとってかわる画期的な治療法であることを明らかにした。また、術後出血の観点から見た適切な術後管理の方法、そして second-look 内視鏡の意義についての再考の余地を示した。本研究は早期胃癌に対する ESD のさらなる発展に寄与すると考えられ、学位の授与に値するものと思われる。